

[課題演習概要]

小学校の特別支援学級における自閉症児の自立活動の実践研究 —コミュニケーション能力に焦点を当てて—

阿 部 悠 平

Yuhei ABE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：自立活動，自閉症，小学校，特別支援学級，コミュニケーション能力

1 研究の目的

小学校特別支援学級の自立活動において，実践を行い，自閉症児のコミュニケーション能力の向上を目指す授業方法を開発することを目的とする。

2 研究の計画

M1	・ユニバーサルデザインの資料に関する 先行研究の分析・検討 ・ユニバーサルデザインを取り入れた社 会科授業の実践
M2	・自閉症と自立活動の先行研究の検討 ・前期試行実践の成果と課題を踏まえ， 後期単元通した授業実践の改善と検証

3 研究の内容

(1) 先行研究

自閉症情緒学級で自立活動の授業開発に取り組んだ松浦（2019）によると自閉症児は，意思伝達手段の獲得や使用自体に困難性があり，自分の気持ちを相手に伝える手段について獲得する必要がある。それは自立と社会参加を目指したコミュニケーション能力の向上に繋がると考える。

自立活動の目標は，特別支援学校学習指導要領（自立活動編）より，個々の児童が自立を目指し，障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識，技能，態度及び習慣を養い，もって心身の調和的発達の基礎を培うことであるとされている。また，古川・一木（2018）は，自立活動指導内容は，個々の実態を的確に把握し，第6章の6区分27項目から必要な項目を選定し，それらを相互に関連づけて設定

することが重要としている。そのため，自立活動を指導には，多くの手続きを踏む必要がある。

小学校特別支援学級自閉症児1名に対し自立活動の時間にコミュニケーション能力の改善を目指した授業を開発し成果と課題を検討する。

(2) 授業計画

自立活動の計画 7月の試行実践やT2としての支援での観察で得られた児童の実態から，課題を抽出した。自立活動では，学習指導要領の6区分から対象児Aには，コミュニケーションと人間関係に課題があり，その2つを重点とした自立活動の授業を構想した。（単元構成全8回）

題材名	伝える楽しさを味わおう
検証本時	8/8
実践日	令和3年12月23日
学習者	B市 小学校特別支援学級 5年A児
主眼	クリスマスカードを作成し，自分が伝えたいことを整理して相手に伝えることで，相手が示した反応等から伝わった時の喜びや伝える楽しさを味わうことができる。

(3) 実践（授業分析）の結果と考察

①文章の構成に関する分析

1学期の最後の試行実践の際に書いた簡単な日記の内容を以下に示す。

今日は，昼休みに〇〇さんと3かいで合ってチャイムがなったけど
つぎ楽しくいっしょにデートをできたらいいです。

A児の文の特徴として，主語がなく，文章の内容が事実の羅列で終わっている。日常生活での会話や日頃の日記でも，主語がなかったり，主語が変わっていたりしたことから，相手に伝えたい内容が伝わらずコミュニケーションのズレに繋がっていると考えた。自閉症は視覚的な認知が強いいため，伝えたいことを構造化し書き，相手にも自分にも理解できる文章構成の練習を行った（1-7/8）。ま

た、事実の羅列となる原因として、「どう思った」や「どんな気持ちになった」といった自分の気持ちや思考の表現が乏しいことも伝わりにくさの原因と考えた。A 児の課題を改善するため、文章を構造化することと自分の気持ちを文章の中に表出することを支援するため、以下自作のシートを考案し実践を行った。

資料1 文構成と気持ちの表出の支援教材

この教材を3回使用したA児は使用後、実際に自分が書いた文章を読んで、「主語を意識することが出来た」「実際に読んでみると分かりやすかった」「きれいな文になった」と自分の文章が構造化されて読みやすくなったことへの自己の気づきを口頭で述べた。そして、検証授業(8/8)の実践では、お世話になった先生に感謝の気持ちを込めたクリスマスカードを送るという主題を設定し、手紙を書いた。実際の内容を資料2に示す。

資料2 A児のクリスマスカードの文章

〇〇先生へ
今年一年たいへんお世話になりました。ぼくは、1・2年生の時よりできることがいっぱいできました。漢字や算数の筆算の計算が早くなって100点もとれるようになって、本当にうれしいです。来年は6年生です。後1年楽しい学校生活といっぱい思い出ができると嬉しいです。Aより

この手紙では、「ぼくは」と主語を明確にして書いていたり、「100点がとれるようになってうれしい」といった自分の気持ちとその理由を書き入れたりすることが出来ている。

以上のことから、構造化された形式に沿って文章を組み立てる練習を積み重ねたことで、文の構成が整い、気持ちの表現が加わることで、自分の伝えたいことを整理できた。手紙を書き終えたA児は、「いい出来栄えですね。早く先生に渡したいです。」と、自分のことをより相手に伝えたいという気持ちになり、積極的なコミュニケーションを行おうとする意欲が高まったと考える。

②コミュニケーションに関する分析

カードを手渡した後のTC分析を資料3に示す。C4では、先生の質問に対して答えた後、すぐに違う話をしており、自分が言いたいことを述べることを優先していることが分かる。このことから、A児は、相手の意見を聞くことや周りの状況を判

断して話すこと等の技能が身につけておらず、まだ円滑なコミュニケーションの構築が出来ていない。そのため、コミュニケーション能力の向上まで到達できなかったと考える。しかし、「言えてよかった」というA児の発言から自分の気持ちを他者に伝えることができたという達成感や、先生からの言葉に涙ぐむ様子から、自分の意思が伝わったことを実感できたのではないかと考える。それは、自分から伝えようとするというコミュニケーションの基礎段階に当たり、伝える楽しさを味わうという目標に到達することができたと考える。

資料3 カードを渡した後のTC分析

S先生に伝え終えた後

T1 どうでしたか？

C2 よかったです。学級目標達成できましたね。

T3 達成できたんやね。かっこいい男にはなれそう？

C4 なれました。先生の先生からもきれいに書けると言われてよかった。

T5 そうなんやね。

T6 勉強も頑張って、漢字も頑張って先生はとても偉いなあと思います。それは、普段から頑張っていることが、みんなにも伝わっていると思うし、他の先生方も見てくれているから、その頑張り、努力をもっと来年は6年生にもなるので、期待していますよ。頑張れそうですか？

C7 (涙ぐんで) はい。

4 成果と課題

○5W1Hや主語・述語など文の構造に関する基礎的な知識を学ぶことを通して、文章を整理することができ、毎日の振り返りシートや会話においても意識して取り入れようとする様子が見られた。

●本実践は、自分の気持ちを相手に伝えることを目的としていたため、相手の気持ちを受け取るといった本来の双方向によるコミュニケーションの在り方まで到達することが出来なかった。

●コミュニケーション能力の向上を図るためには、他者と関わる機会が必要であり、本実践ではその機会が少なかったことから、他者と自然なやりとりが行えるような活動を仕組んだ自立活動について、さらなる検討が必要である。

主な引用・参考文献

古川勝也 一木薫 2018 『自立活動の理念と実践 実態把握から指導目標・内容の設定に至るプロセス』ジアース教育新社

松浦俊弥 2019 『特別支援学級(自閉症および情緒障害学級)における自立活動実践論：授業例としてのコミュニケーションスキルトレーニング法開発研究』淑徳大学研究紀要 第53巻 P121-142

文部科学省 2018 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編